

## (一般関係)

### 一 大八洲開拓記念碑の建立(昭和五十一年)

敗戦による混乱下、生死の境をさまよい寢食を同じくした同志を失った深い悲しみを抱きながら本国に帰還した生き残りの者が、引き続き農業の道を歩まんと佐藤団長の奔走と努力を払った結果により、昭和二十一年十一月当地の菅生沼地区に入植が決定した。

そして、佐藤団長が先遣隊を連れて十日に菅生村に第一歩を印してから逐次、内原の日輪宿舎から本隊も移住した。

それ以来、この十一月十日を再発足した大八洲開拓の入植記念日と定め、昭和四十一年に開催した入植二十周年記念祭までの間に五回に及び、その都度、その節の開拓の成長を楽しみに開拓祭を開催し、開拓者の士気を鼓舞してきた。

国内の多数ある開拓地でもまず入植すると第一に入植記念碑を建立するのが大抵の習わしであるが、大八洲開拓には入植三十年にもなるというのに未だに表徴となる記念碑の姿がないので、昭和五十一年の入植記念日を迎えるに当たり二世の間から建立の要望があったので、佐藤組合長の執筆により三十年振りに開拓記念碑が組合事務所前に誕生した。

表題には「偕に拓き共に築く」と揮毫して、碑の裏面には撰文開拓由来の記を刻んで建立し、十一月十三日除幕式を挙行し、組合員は佐藤組合長が表題の真意とする満洲開拓以来の共同精神を失うことのないよう次の開拓四十年をまず目指して希望と決意を新しく持ったのであった。

#### 碑文 大八洲開拓由来の記

昭和十四年一月、満洲第一次弥栄村開拓団の分村として三江省樺川県千振柳毛河に入植、大八洲開拓団が結成された。苦闘六年余開拓団の基礎がようやくまとまりかけた昭和二十年八月不慮の時局に際会し満洲開拓の夢は消え、一カ年にわたる流浪避難の生活を経て、昭和二十一年六月から九月までに引揚げ、帰国すると同時に何もみすばらしい姿で、当地に再度の開拓の望みを託して入植した。

昭和二十一年十一月十日である。以来三十年、あらゆる苦難を乗り越えて今日の基礎をつくり上げることの出来たのは、組合員の言葉に絶する血と汗と涙の努力の積み重ねた結果で

開拓記念碑の建立



昭和51年11月13日  
入植30周年を節目として開拓記念碑  
を建立。その除幕式を行った



碑の前で記念写真



碑の前に立つ佐藤初代組合長（右）と  
高橋2代組合長（左）



碑の裏面  
「大八洲開拓由来の記」



碑の表面  
「偕に拓き共に築く」



もあるが、国策としての開拓行政を基本に県の適切な施策、入植受入れの地元市町村当局の懇切な援助、さらに関係各機関各種団体開拓者組織の指導、それにも増して地元住民各位の数々の温情あふるる協力の賜であると深く感謝する。この数々の厚い恩恵に報いる道は只一つ私ども心を一つにし更に前進を続け、時代に即した組織農業をつくりあげる事にあると信

## 二 入植三十周年記念祭並びに佐藤組合長の叙勲祝賀会（昭和五十一年）

### 1 盛大に素住台公民館で

経営不振組合の指定を受けた組合事業も経営振興対策の実施と組合員の働きによること二十年、農畜産業の生産上昇によりかつての汚名も返上することが出来て、経済・精神の両面によりやくゆとりと希望の持てる五十年代を迎えることとなった大八洲開拓は、入植三十周年に当たり、春には佐藤組合長が叙勲を受けたので、昭和五十一年十一月十五日を朴して開拓祭と叙勲祝賀会を素住台公民館において開催した。

沈没寸前にまで傾いたこともある大八洲開拓丸がやっと三十年の歳月をかけて大抵の荒波でも乗り切るまでの力が着いてきたことは、全て佐藤組合長のいかなる事態にも微動もしない開拓魂の発揮と一貫した組合員の共同心と組合組織を活

ずる。入植三十周年に当り各位の恩情に深く感謝するとともに未知の前途を切り開く決意を披歴し記念の言葉を記す。

昭和五十一年十一月

大八洲開拓農業協同組合

組合長 佐藤 孝治



30周年記念祭と同時に開拓物故者の慰霊祭も挙行了た。  
写真（下）は焼香する佐藤組合長



用しての確固とした指導と献身的尽力によることは論ずるまでに及ばない。開拓農業一筋に精魂を傾け、数々の業績を積